

V. HOPE プロジェクト

日本学術振興会先端研究拠点事業 HOPE

2004年2月1日から、日本学術振興会先端研究拠点事業として、HOPE プロジェクト（「人間の進化の霊長類的起源」の研究）が始まった。先端研究拠点事業は、我が国と複数の学術先進諸国における先端研究拠点間の交流を促進することにより、国際的な先端研究ネットワークを構築し、戦略的共同研究体制を運営するものである。平成18年度からは国際戦略型に移行し、より活発な国際共同研究システムとして機能している。

1. 先端研究拠点事業 HOPE の事業計画

独立行政法人・日本学術振興会（JSPS）は、学術の国際交流に関する諸事業の一環として、我が国において重点的に研究すべき先端分野における、我が国と複数の学術先進諸国の中核的研究拠点をつなぐ持続的な協力関係を確立することにより、21世紀の国際的な先端研究ネットワークを形成、それを戦略的に運営することを目的とした事業を平成15年秋に開始した。これが先端研究拠点事業と呼ばれるものである。対象分野は、我が国の各学術領域において先端的と認められる分野であり、かつ、交流相手国においても先端的と認められている分野である。尚、共同事業の対象国は、米国、カナダ、オーストリア、ベルギー、フィンランド、フランス、ドイツ、イタリア、オランダ、スペイン、スウェーデン、スイス、英国、オーストラリア、ニュージーランドの15ヶ国に限定されている。京都大学霊長類研究所とマックスプランク進化人類学研究所の共同事業であるHOPEプロジェクトが、その第1号に選ばれた。

HOPE事業は、霊長類研究所の観点から言えば、文部科学省（当時文部省）のCOE拠点形成事業（竹中修代表、平成10-14年度）の基礎のうえにたって、後継の21世紀COEプログラム（平成14-18年度）と連動して、先人の努力を後継発展するものと位置づけられる。こうした国際的研究拠点の創出は、中期計画・中期目標（平成16-21年度）にそって全所的に取り組む課題と認識されている。そのため、事業の採択通知を受けて、所内に「HOPE事業推進委員会」を発足して、「事業計画の指針」を検討立案し、協議委員会に報告して了承された。その指針に基づき、「拠点形成促進型」（平成16年度から17年度）を終了した。そして、平成18年度より「国際戦略型」への移行計画を立て、日本学術振興会に採択されて、以下の事業をおこなうこととした。

1) 共同研究事業の実施

共同研究（野外研究を含む）の実施を通じて、先端的研究領域を開拓する。国際的共同研究の実施打ち合わせならびにその予備調査をおこなう。共同研究のために若手研究者を長期に派遣したり招聘したりする。研究基盤としての海外研究拠点の形成・育成を図る。

人材の有効な交流のため、日本人若手研究者の国際会での発表や情報交換、ポスドクならびに大学院生等の若手研究者の海外で研究成果を発表支援している。また、マッチングファンドに則るが、外国人研究者に研究所での実習や情報交流の機会を与える。

2) セミナー・国際集会事業の実施

共同研究の成果発表や情報国営のためのセミナー・レクチャー・ワークショップ・シンポジウム等を企画実行する。開催地は国内外を問わない。他の事業・企画と連携して、我が国における研究拠点としての役割を果たす。こうした国際集会のための海外渡航費用を支援する。平成18年度はHOPEに関連した研究集会は20以上に及び、なかでも霊長類研究所において開催された「自然史科学と認知科学」（アラン・C・カミル博士）、「バングラデシュの霊長類の現状、分布、生態に関する概論」（モハマド・モスタファ・フィーロツ博士）、「ドイツ霊長類研究所の概要」（エバーハルト・フクス博士）は、多数の参加者を呼び、研究交流に大きな成果を収めている。

3) 若手向けプログラムの実施

HOPEは本体事業とは別に行われる若手向けプログラム開催事業を運営している。これは国内外から講演者を招き、おもにフロアの若手を対象に議論を進めるといふ集会を開催する事業である。平成18年度は、11月6日に名古屋市において、「人間の進化の霊長類的起源」を開催、多数の若手研究者との有効な交流の場となった。今後も引き続き開催を計る。

4) 出版・ネットワーク関連事業

すでに霊長類研究所に常置されているHOPEホームページは国内外の霊長類研究の情報発信の機軸として機能し、多くの利用者に親しまれている。また、例年数十件の原著論文、総説など、研究成果の出版が進んでいる。今後はHOPEの成果を集大成した書籍出版の支援をHOPEによって進める予定である。

2. HOPE の組織

HOPE の事業を推進するために、研究所内に HOPE 事業推進委員会を設けている。毎月 1 回定期的に委員会を開催して、事業の進行具合を検討し、事業の立案の作業をおこない、提案された事業の審査などをおこなっている。各年度の事業委員会の構成は以下のとおりである。

<平成 15 年度>

松沢哲郎, 茂原信生, 竹中修, 上原重男, 松林清明, 渡辺邦夫

<平成 16 年度>

松沢哲郎, 茂原信生, 竹中修, M.A.Huffman, 景山節

<平成 17 年度>

松沢哲郎, 茂原信生, 林基治, M.A.Huffman, 景山節, 橋本千絵, 平井啓久, 遠藤秀紀

<平成 18 年度>

遠藤秀紀, 景山節, M.A.Huffman, 橋本千絵, 林基治, 平井啓久, 松井智子, 松沢哲郎

<平成 19 年度>

遠藤秀紀, 景山節, M.A.Huffman, 橋本千絵, 林基治, 平井啓久, 松井智子, 松沢哲郎

なお、研究拠点内協力者は、本研究所の教員すべてとした。なお、先端研究拠点事業の特色として、中核機関である霊長類研究所の外部の研究者、「拠点外協力者」との協力連携が要請されている。HOPE 事業を推進する組織を、おおまかな研究対象ごとに 4 区分して班を構成した。心、身体、社会、ゲノムの 4 班である。それぞれの班にかかわる拠点外協力者を下記の方々に委嘱してきた。

<「心」研究班>

長谷川寿一（東大）、藤田和生（京大・文）、入来篤史（東京医科歯科大）

<「身体」研究班>

諏訪元（東大）、中務真人（京大・理）

<「社会」研究班>

山極寿一（京大・理）、山越言（京大・アジア・アフリカ地域研究研究科）

<「ゲノム」研究班>

藤山秋佐夫（情報学研究所）、斉藤成也（遺伝学研究所）、村山美穂（岐阜大）

提携する海外の中核的研究拠点は以下のとおり。ま

ずドイツについては、平成 15 年度末に日本学術振興会<小野元之理事長>とマックスプランク協会<ピーター・グルス理事長>のあいだで交わされた協定書をもとに、京都大学霊長類研究所とマックスプランク進化人類学研究所が共同しておこなう事業と位置づけられた。平成 16 年度には、米国のハーバード大学人類学部を米国の中核的研究拠点として日独米の 3 か国での提携を始めた。平成 18 年度からは、イタリアの認知科学工学研究所とイギリスのケンブリッジ大学との提携を進めている。それぞれの国の中核機関とその研究協力者は以下のとおりである。

ドイツ、マックスプランク進化人類学研究所（平成 15 年度発足）

Max Plank Institute for Evolutionary Anthropology (MPIEVA)

Michael Tomasello, Department of Developmental and Comparative Psychology

Christophe Boesch, Department of Primatology

Svante Paabo, Department of Evolutionary Genetics

Jean-Jacques Hublin, Department of Human Evolution

アメリカ、ハーバード大学人類学部（平成 16 年度発足）

Department of Anthropology, Harvard University

Richard Wrangham, Primatology

Daniel Lieberman, Skeletal Biology

Marc Hauser, Primate Cognition

David Pilbeam, Paleoanthropology

イタリア、認知科学技術研究所（平成 18 年度発足）

Institute for Science and Technology of Cognition

ISTC-Consiglio Nazionale delle Ricerche (CNR)

Elisabetta Visalberghi

Giovanna Spinozzi

Patrizia Poti

Giacomo Rizzolatti (Parma University, Istituto di Fisiologia Umana)

イギリス、ケンブリッジ大学生物人類学部（平成 18 年度発足）

Department of Biological Anthropology, University of Cambridge

William McGrew

Nicola Clayton, Department of Psychology, University of Cambridge

Nathan Emery, Department of Psychology, University of Cambridge

Alex Kacelnik, Department of Zoology, University of Oxford

Dora Biro, Department of Zoology, University of Oxford

Andrew Whiten, St. Andrews University

Richard Byrne, St. Andrews University

3. HOPE プロジェクトの概要

人間の心も体も社会も、進化の産物である。「われわれはどこから来たのか」「人間の本性とは何か」、そうした根源的な問いに答えるためには、人間がどのように進化してきたのかを知る必要がある。生物としての人間は、脊椎動物の一種であり、哺乳類の一種であり、その中でも「霊長類」と呼ばれる「サルの仲間」の一種である。では人間は、他のサル類と何が同じでどこが違うのか。本プロジェクト HOPE は、人間と最も近縁な人間以外の霊長類に焦点をあてて、**人間の進化の霊長類的起源 (Primate Origins of Human Evolution)** を探ることを目的としている。HOPE は、その英文題目のアナグラム(頭文字を並べ替えたもの)であると同時に、野生保全への願いも込められている。人間を除くすべての霊長類は、いわゆるワシントン条約で「絶滅危惧種」に指定されている。先端的な科学研究を展開すると同時に、「進化の隣人」ともいえるサル類をシンボルとして、地球環境全体ないし生物多様性の保全に向けた努力が今こそ必要だろう。

日本は、先進諸国の中で唯一サルがすむ国である。そうした自然・文化の背景を活かし、霊長類の研究では、世界に先駆けてユニークな成果をあげ発信してきた。今西錦司(1902-1992)ら京都大学の研究者が野生ニホンザルの社会の研究を始めたのは1948年である。霊長類研究所(略称 KUPRI)が幸島で継続しているサルの研究は60年目を迎えつつあり、9世代にわたる「サルの国の歴史」が紡ぎだされている。さらに1958年に開始したアフリカでの野生大型類人猿調査を継承し、国内外でチンパンジーの研究を発展させてきた。また、日本が創始した英文学術雑誌「プリマーテス」は、2003年からはドイツのシュプリンガー社から出版されるようになったが、現存する世界で最も古い霊長類学の学術誌である。一方、ドイツは、霊長類研究において、ヴォルフガング・ケーラー(1887-1967)によるチンパンジーの知性に関する研究をはじめ長い伝統を有している。とくに、1997年にマックスプランク進化人類学研究所(略称 MPIEVA)が創設され、類人猿を主たる対象にして人間の進化的理解をめざす「進化人類学」的研究が急速に興隆し、この分野における西洋の研究拠点になっている。アメリカについては、ハーバード大学を始め、霊長類学の多方面で多数の研究者が活躍していることは指摘するまでもない。

HOPE プロジェクトは、それぞれの国の中核的研究拠点とそれに協力する共同研究者が、ヒトを含めた霊長

類を対象に、その心と体と社会と、さらにその基盤にあるゲノムについて研究するものである。研究拠点間の国際的な協力のもと、霊長類に関する多様な研究分野が相互交流によってさらに活性化し、「人間の進化の霊長類的起源」に関する新たな知見の蓄積と研究領域の創造をめざしている。「人間はどこから来たのか」「人間とは何か」という究極的な問いに対する答えを探索学際的な共同作業だともいえる。そうした基礎的な研究こそが、「人間はどこへ行くのか」という、現代社会が抱える諸問題に対する生物学的な指針を与えることになるだろう。

そのために、生息地での野生霊長類の野外研究を含めた共同研究の実施、若手研究者の交流と育成、国際ワークショップ・シンポジウム等の開催をおこなう。また、インターネット・サイトならびにデータベースの充実や、出版活動(とくに英文書籍による研究成果の出版シリーズの発足)を通じて、その研究成果の普及・啓発に努める。以上が HOPE プロジェクトのめざす事業である。

HOPE の財務であるが、およそ2500万円規模の事業が例年実施可能となっている。事業の主旨により、外国渡航旅費がほとんどすべてを占める。これまで例年合計30から60件の支援事業をおこなってきた。HOPE プロジェクトは平成16年2月に発足、同年3月に京都で実施した国際集会により、日独米のコーチェアが一堂に会して、京都大学霊長類研究所(KUPRI)とマックスプランク進化人類学研究所(MPI EVA)とハーバード大学人類学部(HUDA)とのあいだの共同事業の基礎固めをおこない、交流を本格的に開始している。

過去の実施事業を総括してみると、ドイツのマックスプランク進化人類学研究所のマイケル・トマセロ所長をはじめとする認知発達科学の研究グループと共同して、人間の認知機能の発達とその進化的基盤に関する研究をおこなった。ドイツ側がおもに社会的知性の側面を担当し、日本側はおもに道具的知性の側面を担当した。また、マックスプランク進化人類学研究所の比較ゲノム研究部門と共同研究をおこなった。さらに、言語や認知ともからむ形態・化石資料についての情報交換をおこなった。アメリカの拠点であるハーバード大学人類学部を加えた3者で、おもに大型類人猿の野外調査をおこなった。チンパンジーについて、アフリカの東部・中央部・西部の生息域に焦点を絞って研究を重ねた。また、日本側からとりわけ強く推進した研究交流として、ザイルでの野生ボノボの野外研究と、ボルネオの野生オランウータンの野外研究がある。これらの種と地域に関しては深く研究を推進し、その生態と社会についての新たな知見を加えた。平成18年度は、とくに霊長類のみならず、多くの野生動物の進化学的基盤を検討するに至ってい

る。アメリカ・スミソニアン自然史博物館における東南アジア産リス類の標本検討、マダガスカル産哺乳類、アジア島嶼域の野生哺乳類、そして、インドシナ地域の家畜集団をめぐる形態学的検討を行っている。また、ベトナム、ミャンマー、ラオスなど、これまで調査の遅れていた国々へも、調査渡航が行われ、現地において海外先進国との綿密な交流が進められている。合わせて国内の大学研究者を東南アジアの野生哺乳類調査に送り、東アジア地域における生物地理学的研究成果を一定の水準でまとめあげることができた。また、多くの渡航プラン実際に若手を海外の集会や調査地に派遣することを目的としてきたため、実際の人的交流やフィールドワークを通じての若手研究者養成に関して、最大の成果を上げることができた。若手は未来の研究活動に実際に貢献する人材であり、その国際的養成を本計画のもっとも重要な研究教育プランとして位置づけたことが、機能したと評価できる。

さらに、国際学術情報の収集、SAGA シンポジウム、国際ヒトゲノム会議、霊長類研究所国際セミナー、ドイツ霊長類センターでのセミナーや会合を通じ、多領域の研究者と学術研究および教育に関する情報の交換を達成することができた。合わせて、平成 18 年度は、60 件を超える渡航事業を支援することができた。18 年 6 月にウガンダで開催された国際霊長類学会においても、研究交流を進め、これからの時代の哺乳類学の将来構想を構築することに対して、大きな貢献を示すことができた。

以上のように、人的交流を発展させながら、テーマを学際的に研究するというシステムが有効であることを、HOPE 事業は証明することができている。そのため、HOPE のような研究組織間の人的交流を中心として研究遂行が、今後の学術施策の中で重要なものとされることは間違いない。大型機器や施設の導入のみならず、人と人が会い、次世代を育てつつ研究する仕組みづくりの、典型的な事例といえるだろう。

4 平成 18 年度の各事業とその概要

平成 18 年度の各事業内容を以下に列挙する。なお、各事業の詳細については、HOPE 事業のインターネット・サイト上で、和文・英文の双方で報告しているので参照されたい。 <http://www.pri.kyoto-u.ac.jp/hope/>

2006 年度参加者一覧

事業番号 1, 派遣（若手交流）

半谷吾郎（京大霊長類研・助教授）

バーバリマカクとニホンザルの食物の化学成分の比較

モロッコ、ウガンダ

2006 年 6 月 17 日～7 月 6 日

事業番号 2, 招聘（若手 PGM）

Eberhard Fuchs（ゲッティンゲン大学医学部神経学・教授）

マーモセット、ツパイの脳神経系へのストレスと加齢の影響に関するセミナーの実施、ドイツ霊長類センターの実情に関する情報交換

2006 年 11 月 4 日～11 月 12 日

事業番号 3, 派遣（共同研究）

M.A.Huffman（京大霊長研・助教授）

飼育チンパンジー行動観察、学術大会及び研究連絡イタリア

2006 年 9 月 9 日～10 月 1 日

事業番号 4, 派遣（若手交流）

Nahallage, Charmalie A.D.（京大霊長研・大学院生 DC）

Primate census and comparative socio-ecology of toque macaque sub species in the wet and dry zones of Sri Lanka.

スリランカ

2007 年 1 月 6 日～2007 年 3 月 20 日

事業番号 5, 派遣（共同研究）

押田龍夫（帯広畜産大学畜産学部・助教授）

ベトナムの森林性哺乳類相に関する生物地理学および解剖生理学的検討

ベトナム

2006 年 12 月 21 日～1 月 1 日

事業番号 7, 派遣（共同研究）

澤田純明（聖マリアンナ医科大学解剖学教室・助手）

ベトナム Hang Cho 遺跡から産出した、霊長類を含む完新世初頭哺乳類化石の形態学的検討

ベトナム、シンガポール

事業番号 8, 派遣（若手交流）

託見健（京大霊長研・大学院生 DC）

第 36 回北米神経科学会への参加「霊長類の思春期の発来にともなう視床下部神経細胞への神経入力の変化」についての研究発表

アメリカ

2006 年 10 月 13 日～10 月 20 日

事業番号 9, 派遣（若手交流）

米澤隆弘（総合研究大学院大学先端科学研究科生命体科学専攻・大学院生 DC）

後期更新世・完新世において絶滅した大型哺乳類及び大型鳥類の ancient DNA の研究
ドイツ, ポーランド
2007 年 3 月 7 日～3 月 17 日

事業番号 10, 派遣 (共同研究)

中務真人 (京都大学理学研究科・助教授)
プリオピテクスとアフリカ化石人類猿の運動復元
スイス, ケニア, ウガンダ
2006 年 11 月 19 日～12 月 10 日

事業番号 11, 派遣 (若手交流)

山本亜由美 (京大霊長研・大学院生 DC)
化石大型類人猿と同所的に生息した旧世界ザルの形態学的研究
ケニア, ベトナム, タイ
2007 年 1 月 16 日～ 3 月 18 日

事業番号 12, 派遣 (共同研究)

藤田和生 (京都大学文学研究科・教授)
フサオマキザルの道具使用に見られる因果認識
ブラジル
2006 年 8 月 2 日～8 月 15 日

事業番号 13, 派遣 (若手交流)

堤清香 (京都大学文学研究科・大学院生 DC)
フサオマキザルにおける 3 項目の社会関係の理解
ブラジル
2006 年 8 月 2 日～9 月 20 日

事業番号 14, 招聘 (若手 PGM)

Anjali Goswami (英国自然史博物館・研究員)
ニホンザルの個体成長における変異性と頭骨のモジュール性に関する研究
イギリス
2006 年 10 月 28 日～11 月 19 日

事業番号 15, 派遣 (共同研究)

川島友和 (東京女子医科大学医学部解剖学教室・助手)
オランウータン顔面部形態変化のマクロ解剖ならびに骨形態計測による形態学的解析
ドイツ, オランダ
2007 年 2 月 12 日～2007 年 3 月 23 日

事業番号 16, 派遣 (若手交流)

金森朝子 (東京工業大学生命理工学研究科生体システム専攻・大学院生 DC)
野生ボルネオ・オランウータンのオスの社会行動に関する研究

マレーシア
2007 年 3 月 5 日～3 月 31 日

事業番号 17, 派遣 (共同研究)

濱田穰 (京大霊長研・助教授)
ベトナムと中国南部の霊長類分布・生息実態予備調査ならびに東南アジア動物園協会大会への出席
ベトナム, 中国
2006 年 9 月 10 日～10 月 1 日

事業番号 18, 派遣 (共同研究)

山極寿一 (京大理学研究科動物学教室・教授)
Oxford University が主催するシンポジウムに出席し発表
イギリス
2006 年 5 月 4 日～5 月 9 日

事業番号 19, 派遣 (若手交流)

Rizaldi (京大霊長研・大学院生 DC)
IPS (国際霊長類学会) 及びオーストラリアほ乳類学会への参加・発表
ウガンダ, オーストラリア
2006 年 6 月 22 日～7 月 27 日

事業番号 20, 派遣 (若手交流)

Zhang Peng (京大霊長研・大学院生 DC)
IPS (国際霊長類学会) への参加・発表
ウガンダ
2006 年 6 月 22 日～7 月 11 日

事業番号 21, 派遣 (共同研究)

杏掛展之 (理化学研究所脳科学総合研究センター生物言語研究チーム・特別研究員)
霊長類におけるオス間の繁殖の偏り: モデルの検証と性感染症との関連
ドイツ
2006 年 5 月 4 日～5 月 20 日

事業番号 22, 派遣 (共同研究)

江木直子 (京大霊長研・非常勤研究員)
ロリス科四肢骨の荷重耐性に関する比較形態学的研究
スイス
2006 年 9 月 26 日～10 月 13 日

事業番号 23, 派遣 (共同研究)

佐々木基樹 (帯広畜産大学・助教授)
東南アジアに生息する哺乳類の樹上適応戦略の解明
ベトナム
2006 年 12 月 21 日～12 月 30 日

事業番号 26, 派遣（共同研究）

渡邉日出海（北海道大学・教授）
ゲノム配列データの集団遺伝学的解析に基づくヒト
ーチンパンジー間種分岐過程の推定に関する研究
の打ち合わせ
アメリカ
2006 年 5 月 23 日～5 月 30 日

事業番号 27, 派遣（共同研究）

斎藤成也（国立遺伝学研究所集団遺伝研究部門・教
授）
ヒトおよび他の霊長類における血液型および免疫系
の遺伝子の進化
フランス
2006 年 12 月 1 日～12 月 9 日

事業番号 32, 派遣（共同研究）

井上雅仁（京大霊長研・教務補佐員）
北米神経科学会出席
アメリカ
2006 年 10 月 13 日～10 月 20 日

事業番号 33, 派遣（共同研究）

三上章允（京大霊長研・教授）
ドイツ霊長類センターおよびベルギー・カトリック
大学との研究交流
ドイツ、ベルギー
2006 年 11 月 14 日～11 月 23 日

事業番号 35, 派遣（共同研究）

松本晶子（沖縄大学人文学部・助教授）
サバンナヒヒのメスの発情同期の解明
アメリカ
2006 年 9 月 4 日～9 月 19 日

事業番号 36, 派遣（共同研究）

國松豊（京大霊長研・助手）
東南アジア新生代後期の化石人類猿に関する形態学
的研究
ベトナム、タイ
2007 年 2 月 11 日～2 月 25 日

事業番号 37, 派遣（共同研究）

早石周平（琉球大学大学教育センター・講師）
第 21 回国際霊長類学会大会での研究発表ならびに類
人猿生息地の調査地見学
ウガンダ
2006 年 6 月 24 日～7 月 6 日

事業番号 39, 派遣（共同研究）

近藤恵（お茶の水女子大学生生活科学部・助手）

東アジアのホモ・エレクトスに関する年代学的研究
ドイツ
2007 年 2 月 7 日～2 月 18 日

事業番号 40, 派遣（共同研究）

松原幹（京大霊長研・教務補佐員）
国際霊長類学会参加 および野生マウンテンゴリラの
遊び行動における環境的・社会的影響に関する研
究
ウガンダ
2006 年 6 月 22 日～7 月 6 日

事業番号 41, 派遣（共同研究）

橋本千絵（京大霊長研・助手）
野生チンパンジーの食物と遊動の季節変化に関する
研究
ウガンダ
2006 年 12 月 24 日～2007 年 1 月 9 日

事業番号 42, 招聘（若手 PGM）

Chris S.Duvall（ウィスコンシン大学地理学部・院生）
西アフリカにおけるチンパンジーの生息環境に関す
る比較研究
アメリカ
2006 年 11 月 4 日～11 月 15 日

事業番号 43, 派遣（共同研究）

古市剛史（明治学院大学国際学部・教授）
野生ボノボにおける、季節による食物の分布様式と遊
動、採食行動の関係について
コンゴ、ウガンダ
2006 年 8 月 29 日～9 月 26 日

事業番号 44, 派遣（共同研究）

遠藤秀紀（京大霊長研・教授）
タイ・ラオスにおける野生哺乳類・鳥類の形態学的多
様化とその飼育・家畜化過程を含めた変異要因の解析
タイ、ラオス
2007 年 3 月 15 日～3 月 24 日

事業番号 46, 派遣（共同研究）

Jeon A-Ram（京大霊長研・大学院生 DC）
第 6 回国際サイトカイン学術大会への参加、研究発表
と釜山大学校大学院生と学部生たちのための研究
会に参加、京都大学霊長類研究所と霊長類研究に関
して紹介
オーストリア、韓国
2006 年 8 月 25 日～9 月 3 日

事業番号 47, 派遣（共同研究）

押田龍夫（帯広畜産大学畜産学部）
ベトナムの森林性哺乳類相に関する生物地理学のお
よび形態学的検討
ロシア，イギリス
2007年3月21日～2007年3月30日

事業番号 48, 派遣（共同研究）

辻川寛（東北大学大学院医学系研究科人体構造学分
野・助手）
中期中新世アフリカ産ホミノイドの周辺哺乳類相に
ついての研究
ケニア，フランス
2006年9月23日～10月29日

事業番号 49, 派遣（共同研究）

清水大輔（京大霊長研・非常勤研究員）
Nacholapithecus の大白歯におけるエナメル象牙境お
よびエナメル質微細構造研究のための資料収集
ケニア，イギリス
2006年8月16日～9月20日

事業番号 50, 派遣（共同研究）

松井智子（京大霊長研・助教授）
SRCD (Society for Research in Child Development)
Biennial Meeting 参加，および乳幼児の視線検出実
験についての意見交換
アメリカ
2007年3月20日～4月5日

事業番号 51, 派遣（共同研究）

佐々木基樹（帯広畜産大学・助教授）
タイにおけるツパイ類，ジャコウネコ類，リス類，タ
ケネズミ類の繁殖機構および栄養戦略の比較哺乳
類学的検討
タイ
2006年10月24日～2006年10月30日

事業番号 52, 派遣（共同研究）

樺沢麻美（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科
・院生 DC）
シエラレオネにおけるチンパンジー保全の現状と将
来像
シエラレオネ，ギニア
2006年10月6日～2007年3月16日

事業番号 53, 派遣（共同研究）

伊村知子（関西学院大学文学部心理学教室・非常勤研
究員）
ヒト，チンパンジー，ニホンザルにおける絵画的奥行
き知覚：選好リーチング課題を用いて

アメリカ
2006年9月17日～10月1日

事業番号 54, 派遣（共同研究）

遠藤秀紀（京大霊長研・教授）
スミソニアン研究所におけるツパイ類，テンレック
類，トゲネズミ類に関する適応形質の比較機能形態
学的検討
アメリカ
2006年7月19日～7月25日

事業番号 55, 派遣（共同研究）

木村順平（日本大学生物資源科学部獣医学科・助教
授）
ミャンマーにおけるマメジカ類・ツパイ類の分子遺
伝学のおよび比較形態学的総合調査
ミャンマー，タイ
2006年10月25日～11月4日

事業番号 56, 派遣（共同研究）

上野吉一（京大霊長研・助教授）
霊長類飼育・繁殖施設の設計および飼育管理に関する
研究
タイ
2006年10月25日～10月31日

事業番号 57, 派遣（共同研究）

川田伸一郎（国立科学博物館動物研究部・研究員）
ベトナム北部における森林性哺乳類相の多様性に関
する進化生物学的研究
ベトナム
2006年11月28日～12月3日

事業番号 58, 派遣（共同研究）

牛田一成（京都府立大学大学院農学研究科生物機能学
専攻・教授）
大型類人猿の腸内に生息する原生動物に関する研究
ギニア，シエラレオネ
2006年11月13日～12月1日

事業番号 59, 派遣（共同研究）

半谷吾郎（京大霊長研・助教授）
ダナムバレー森林保護区の霊長類の群集生態学
マレーシア
2006年12月21日～2007年1月6日

事業番号 60, 派遣（共同研究）

杉山幸丸（京都大学・名誉教授）
ボッソウ 30 周年国際シンポジウム参加・発表
ギニア

2006 年 11 月 11 日～12 月 28 日

事業番号 61, 派遣（共同研究）

中村美知夫（京都大学理学研究科動物学教室・助手）
ボッソウ 30 周年国際シンポジウム参加
ギニア

2006 年 11 月 24 日～12 月 2 日

事業番号 62, 招聘（若手 PGM）

Tony Tosi（ニューヨーク大学・研究員）
若手研究ワークショップ参加
アメリカ

2006 年 11 月 2 日～11 月 12 日

事業番号 63, 招聘（若手 PGM）

Taranjit Kaur（ヴァージニア工科大学・助教授）
飼育チンパンジー行動観察，学術大会及び研究連絡
アメリカ

2006 年 11 月 2 日～11 月 8 日

事業番号 64, 派遣（若手交流）

Zhang Peng（京大霊長研・大学院生 DC）
Grooming relations within one-male harems of the
Sichuan snub-nosed monkey (*Rhinopithecus roxellana*) in their
nature habitat.

中国

2007 年 1 月 8 日～1 月 25 日

事業番号 65, 派遣（共同研究）

M.A.Huffman（京大霊長研・助教授）
スリランカ霊長類 4 種の広域分布調査及びトクモン
キーの社会生態学的研究
スリランカ，インド

2007 年 2 月 2 日～3 月 1 日

事業番号 66, 派遣（共同研究）

古市剛史（明治学院大学国際学部・教授）
野生チンパンジーの文化的行動の比較研究
アメリカ

2006 年 3 月 22 日～3 月 28 日

事業番号 67, 派遣（共同研究）

林田明子（岐阜大学大学院連合獣医学研究科・大学院
生 DC）
東南アジアに生息するリス科の頭蓋に見られる機能
形態学的比較
アメリカ

2006 年 3 月 16 日～3 月 29 日

（文責：遠藤秀紀）

VI. 広報活動

霊長類研究所では広報委員会が主体となって，オープンキャンパス（大学院ガイダンス），公開講座，市民公開などの催しを通じて研究所の活動を一般の方に紹介するよう努めている．また，研究所年報，リーフレットの作成，ホームページの公開などの広報活動も行っている．

1. オープンキャンパス：大学院ガイダンス（第 4 回）

大学の学部学生（2,3,4 年生）をおもな対象としたオープンキャンパスを，2007 年 2 月 22 日（木）～23 日（金）に開催した．各分野・センター・施設の教員による講義，所内見学，各分科教員との懇談会，さらに大学研究生・研究員等も参加した懇親会が行われた．参加者は 37 名だった．

<プログラム>

2007 年 2 月 22 日（木）

松沢哲郎（所長）「開会の挨拶」

松井智子（大学院世話役副議長）「大学院入試に関するガイダンス」

講義 1 景山節「サル類の健康と病気」

講義 2 田中洋之「マカクザルコロニーの集団遺伝学的研究」

所内見学 1

講義 3 半谷吾郎「霊長類の密度を決めるもの」

講義 4 室山泰之「里のサルたちについて考える-野生動物管理学入門-」

講義 5 橋本千絵「ボノボとチンパンジーの性行動について」

講義 6 田中正之「チンパンジーの認知発達」

各分科教員との懇談会 1（希望者のみ）

懇親会

2007 年 2 月 23 日（金）

講義 7 正高信男「言語の起源と音楽」

講義 8 宮地重弘「行動決定，行動発現の脳内メカニズム」

講義 9 林基治「サルの脳の発達加齢を分子レベルから探る」

所内見学 2

講義 10 今井啓雄「ポストゲノム時代の霊長類研究」

講義 11 毛利俊雄「ニホンザルの矢状稜」

講義 12 高井正成「サルの生まれた日：霊長類の起源と